

令和3年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	奈良県奈良市法蓮町1000番地
管理機関名	学校法人 奈良育英学園
代表者名	理事長 藤井 宣夫

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月10日(契約締結日)～ 令和3年3月31日

2 指定校名・類型

学校名	育英西中学校・高等学校
学校長名	北谷 成人
類型	グローバル型

3 研究開発名

「他者を巻き込む行動」により地域に貢献する「自立女子」の育成

4 研究開発概要

進路目標の異なる3コースをもつ本校では、2020年度大学入試改革に先駆けて、課題解決型の学びを全コースの一部教科で導入した。また探究的な学びを目的とした学校設定科目を一部コースで設置してきた。これらの先行的な取り組みを実施する中で、どのコースにも共通する課題があると認識している。それは課題解決に際し、解決策提案にとどまりがちな点である。将来地域人材として地域課題の解決に資する女性の育成にあたっては、この現状を打開し、「行動する力」とりわけ「他者を巻き込む行動ができる力」を培う必要がある。そこで本校は3コースの特性を生かし、下記の研究開発を行う。

1. 特設コースⅠ類を対象とした学校設定科目「シナジータイム」、立命館コースを対象とした学校設定科目「Science&Discovery」(S.D.)を体系化する。
2. 特設コースⅡ類を対象とした奈良県立大学との共同プロジェクトを軸にして、本校中学校で導入した国際バカロレアにおける、「概念」を中心に学ぶという考え方に依拠した授業開発をする。教科内容ありきではなく、概念ありきの学びを構築し、教科学習の中で思考力・探究力を培う。
3. 地域・世界とのつながりを生かして実現する行動実践による生徒への影響を検証する。

4. 生徒に自らの力のメタ認知を促すための評価法を開発する。

これらの研究開発の素地として、「知識・技能の獲得」「内的動機付け」「実践」という各過程をスパイラル式に経験し、その過程を生徒自身がメタ認知することで、「他者を巻き込む行動ができる力」は得られると仮説を立てる。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
沼田 守弘	奈良育英高等学校・校長	協力校
東 誠司	奈良育英小学校・校長	
田尻 忠邦	特別非営利活動法人 関西 NGO 協議会・理事	
福井 重忠	社会福祉法人 奈良市福祉協 議会・会長	
松岡 慧祐	奈良県立大学 地域創造学部 ・准教授	
村井 猛	有限会社 村井食品・社会	
桜井 政成	立命館大学 政策科学部・教 授	
内田 忠賢	国立大学法人 奈良女子大学 ・教授	

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	理事長 藤井 宣夫
学校法人 奈良育英学園(管理機関)	事務局長 竹田 基宏
育英西高等学校(推進校)	校長 北谷 成人
奈良育英高等学校(協力校)	校長 沼田 守弘
奈良育英小学校	校長 東 誠司
育西会(推進校 PTA 組織)	会長 廣瀬 昇
特別非営利活動法人 関西 NGO 協議会	代表理事 三輪 敦子
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	会長 福井 重忠
公立大学法人 奈良県立大学	学長 浅田 尚紀
有限会社 村井食品	社長 村井 猛
学校法人立命館 立命館大学	学長 仲谷 善雄
国立大学法人 奈良女子大学 大和・紀伊半島 学研究所	所長 保 智己

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	中山 芳一	国立大学法人 岡山大学・准教授	非常勤職員
海外交流アドバイザー	玉井 満代	(株)タマイインベストメントエデュケーションズ・社長	非常勤職員
海外交流アドバイザー	田中真美子	HOME STAY AUSTRALASAI・プロジェクトマネージャー	非常勤職員
海外交流アドバイザー	北田 多喜	翻訳家	非常勤職員
海外交流アドバイザー	相宅 政則	如水館バンコク高等部・教頭	非常勤職員
地域協働学習支援員	久保 佳苗	育英西中学校・高等学校・事務嘱託	派遣

## 9 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム関連		14 26	18			24		10	19	29		
運営指導委員関連		20 26		31		25		6 21 27	1 19	6 29 30	9 他	21
海外交流アドバイザー						25		12				
地域協働学習実施支援員	←											→

### (2) 実績の説明

#### ① 管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

##### i. コンソーシアム関連の活動内容

日程	内容
5/26	第1回会合：今年度実施計画について説明し、その内容について協議・決定する。
5/14、6/18、9/24、11/10、12/19	立命館一貫教育部との定例会合 主に立命館コースの教育内容について協議し、S.D.の改善や連携行事について提言を受ける。
5/14	奈良女子大学 保先生と今後の取り組みについて検討

1/29	第2回会合：今年度の報告と来年度の計画について協議し、方針を決定する。
------	-------------------------------------

ii. 運営指導委員関連の活動内容

日程	内容
5/26	第1回会合：今年度の実施計画について説明し、今年度の方針について指導助言を受ける。
11/6、12/19、2月、3/21	奈良市社会福祉協議会と生徒との合同ミーティング。主に今後の活動方針や活動内容の妥当性などについて生徒とともに議論した。また、生徒の主体的な活動の可能性について具体的に議論した。 ・11/6：12月に実施するフードパントリーについてのガイドンスを実施 ・12/19：フードパントリーボランティアに参加し、そこに参加していた司法書士やNPO法人の方々から今後の継続的な取り組みのためについてのディスカッションを行った。 ・2月：今後のボランティア活動について議論 ・3月：フードドライブ実施(3/21) 地域の子育てサロンに参加。
7/31、9/25、11/27、1/30	県立大学との共同プログラムにおいて、松岡准教授の特別講義を受け、中間発表会での指導助言と、全国フォーラム参加に向けて最終発表の選考会への参加とブラッシュアップの指導。(アドバイザー) 1/30：全国高校グローバル探究オンライン発表会参加
5/20、11/21、12/1、1/6、2/9	村井食堂との「お弁当総選挙」における取組 ・今年度の取組と流れについて説明 ・校内発表プレゼンの内容説明等 ・校内発表・商品開発に向けて生徒との打合せ ・商品化の企画会議
1/29	第2回会合：今年度の報告と来年度の計画について説明し、指導助言を受ける

iii. 海外交流アドバイザー関連の活動内容

アドバイザー名	日程	内容
玉井 満代	メール	インドにおける交流校探しに関する助言
田中 真美子	メール	オーストラリアにおける短期留学に関する助言
北田 多喜	メール 9/25 11/12	交流校とのやり取りの仲介 ディニアプトリ女子校とのオンライン交流実施 に向けて話し合い。

iv. 地域協働学習実施支援委員関連の活動内容

事務担当の派遣職員として採用。グローバルに関する会計、事務、案内、発送を主に担当。週4日勤務。

② 事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・ 研究校による取り組みが、継続的に実施できるよう、教員及び生徒の海外派遣費や講演会謝礼などについて、管理機関における予算計上を行っている。
- ・ 本事業に対する教員の事務作業軽減のため、グローバル担当事務職員として地域協働学習実施支援員を1名採用している。

③ 高等学校と地域の協働による取組に関する協定等の締結状況について

- ・ 令和2年3月に、コンソーシアムメンバーである学校法人立命館との「学術に関する協定書」の更新。
- ・ 令和2年7月1日に都留文科大学との協定を締結

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「シナジータイム」成果発表						○			○			○
「S.D.」成果発表											○	
「県立大学共同プログラム」成果発表						○		○	○	○		
「家庭基礎」弁当商品開発									○	○		
海外の学校との学校交流									○			○
輝く女性の講演会で内的動機付けを向上											○	

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

研究開発実施計画に記載した通り、推進校は、学校設定科目「シナジータイム」（特設コースⅠ類）、「Science&Discovery」（立命館コース）の実践と、特設コースⅡ類を中心に、教科での探究的な学びの実践を通じて、生徒が「知識・技能を獲得」するにとどまらず、自ら課題を発見し、他者と協働しながら主体的に取り組む姿勢を身につけることに重点を置いた。

i. 「シナジータイム」（特設コースⅠ類）

【1年】

- ・ 1学期は、授業開きを兼ねて、「小学生に向けたシナジータイムとは？」をテーマに、グループで話し合い、「コミュニケーション力」「協働力」を高めた。休校期間中での授業開きであったため、ZOOMを活用して実施した。6月以降の取り組みは対面で行っている。
- ・ 夏休み課題として、「SDGsの観点で、世界でどのような取り組みが実施されているか」、「タイについて調べる」をテーマに個人レポートを作成し、「SDGs」に

について知るきっかけ作りと、2学期の学習準備の機会とした。

- ・ 2学期は、夏休み課題「タイについて調べる」で、各自が立てたテーマをもとにグループ分けを行い、各自が実施した調査結果をまとめて、9月末に実施した文化祭で発表した。
- ・ 文化祭後は、前年度、タイについて探究活動を実施した2年生から、「タイに関する課題」を引き継ぐための会を実施し、各自が取り組む課題を決め、課題に対する探究を深めた。
- ・ 探究の成果は、12月下旬に実施した本校独自コンテスト「SDGs コンテスト」で発表した。

## 【2年】

- ・ 前年度、新型コロナウイルス感染拡大のため中止とした「タイ課題解決型ツアー」の代わりに、8月に、ZOOMを活用して、タイの学校との交流を図った。そこで、前年度から取り組んできた自分たちの課題解決策を発表し、意見交流をする中で、内容を深めた。その成果は、9月に実施された文化祭で発表した。
- ・ 10月以降は、1年次からの「シナジータイム」の活動をふまえ、「社会で必要とされる人とはどのような人か」を考えた上で、各自が、「今の自分に必要な力」を分析した。

## ii. 「Science&Discovery」 (立命館コース)

「Science&Discovery」(以下「S.D.」と呼ぶ)は、立命館コース開設時から取り組んでいる推進校の学校設定科目である。高校2・3年の2年間で、探究活動を完成させる。生活に根ざした身近な疑問をもつことを出発点に、生徒自身が研究テーマを設定する。

### 【「S.D.基礎」(1年)】

- ・ 1学期は、協働学習に必要なスキル(コミュニケーション力)を身に付けることを中心に実施した。具体的には、「常識を疑う」問いを提示し、協働して自分たちなりの解答を導き出し、他者に伝える練習を、複数回行った。
- ・ 7月に、「SDGsカードゲーム」の体験を通して、「SDGs」の取り組みを学ぶ機会をもった。
- ・ 2学期は、理系基礎実験(化学分野・物理分野)と、RESAS(地域経済分析システム)を活用して、奈良の課題を考え、自分たちの解決策を提案する学習をグループ単位で実践した。その成果は、12月に本校で実施した「SDGsコンテスト」で発表した。

### 【「S.D.探究」(2年)】

- ・ 1学期は、文系探究・理系探究の方法の違い、リサーチクエッションの立て方、資料の集め方等、探究活動に必要な知識を知ることを中心に実践した。
- ・ 7月に、立命館大学政策科学部の桜井教授から、「研究テーマの作り方」をテーマに講義を受けた。(文系探究志望者 14名が参加)
- ・ 2学期は、文系・理系に分かれて実施した。文系分野は、個人探究、理系分野は、グループ探究で実施している。それぞれ、研究テーマの確立・具体化、研究計画書の構想を中心に行った。

- ・ 3 学期は、2 月 26 日に実施される「中間発表会」に向けて、探究活動を継続しつつ、今年の探究活動のまとめを実施した。

### iii. 近隣大学との共同プロジェクト（特設コースⅡ類）

#### 【1 年】奈良県立大学との共同プログラム

- ・ 奈良県立大学地域創造学部 松岡准教授の指導のもとに、「奈良県の女性就業率の低さ」をテーマに探究活動を実施した。
- ・ 松岡准教授の指導が入る前（1 学期）に、各自が、奈良の課題と世界の課題（SDGs）を調べ、共通項目をまとめて発表した。各自の発表をお互いに聴きあい、クラスで取り組む大テーマを「ジェンダー問題」にすることに決めた。
- ・ 夏休みに、松岡准教授から、「ジェンダーと労働について」の講義を受けた。その後、夏休み課題として、身近な人（家族・親戚・友人）にジェンダー問題調査を行った。
- ・ 2 学期当初に、夏休み課題の調査結果の共有を行った上で、グループごとに探究テーマから、リサーチクエッションを立て、調査を行った。
- ・ 調査結果をまとめ、9 月下旬の文化祭で発表した。
- ・ 文化祭後は、調査結果を踏まえての自分達の提案、提案を行動に移すことを考え、探究を深め、11 月下旬に、松岡准教授を招き、最終発表会を実施した。最終発表会の評価をもとに、「2021 年全国高等学校グローバル探究オンライン発表会」の「日本語発表部門」の代表 1 チームを決定した。

#### 【2 年】奈良女子大学との共同プログラム

- ・ 現代文で学習した教材との関連から、ジェンダー問題について関心を持ち、興味あるジェンダー問題を個人で考えた。
- ・ 共通点があるテーマごとにグループ分けをして、グループで先行研究や事例を調査した。
- ・ 調査結果をまとめ、9 月下旬に実施した文化祭で発表した。
- ・ 文化祭後は、調査結果をもとに、自分達ができる解決策、行動を考え、実施に向けて計画を立てた。
- ・ 有志 6 名が、「SR サミット FOCUS」（11 月 14 日・15 日）に参加し、他校とオンライン交流を通じて、ジェンダーについて探究している学校の生徒たちと意見交換する機会を得た。
- ・ 11 月に、探究内容の英語版データを作成し、クラス内でオーディションを実施し、「2021 年全国高等学校グローバル探究オンライン発表会」の「英語発表部門」に出場する代表 1 チームを決めた。
- ・ 3 学期は、探究成果をもとに考えた自分達の行動を実践に移す計画を立て、実践した。

### iv. 教科での探究的な学びの構築（特設Ⅱ類）

本校中学校で導入している国際バカロレアにおける「概念」を中心に学ぶ考え方に依拠し、概念ありきの学びの構築を以下の科目で実践した。その際、「概念」で教科をつなぎ、教科横断的な学びの機会を設けた。実施教科の授業は、1 月 29 日に実施される「グローバル事業実践発表会」の研究授業にもなった。

### v. SDGs コンテストとディニアプトリ女子校への育西アンバサダーの派遣

- ・ 計画では、SDGs コンテストの入賞者（入賞グループ）を、ディニアプトリ女子校

へ派遣する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、ディニアプトリ女子校への派遣を中止した。代替として、12月11日に、ディニアプトリ女子校とのオンライン交流を、高校1年から希望者を募り実施した。交流テーマは、「環境問題」で、具体的には、「学校のゴミ」を題材に意見交流を行った。また、両校の学習の取り組み等も紹介しあった。

- ・ SDGs コンテストは、12月25日に、高校1年特設I類（シナジータイムの取り組み）、高校1年立命館コース（S.D.基礎の取り組み）が参加し、優秀グループを6グループ決定した。外部審査員として、推進校のコンソーシアムに携わっている方々に参加していただいた。

vi. English Plus Department の取り組み

- ・ ネイティブスピーカー2人がティームティーチングで、中学3年から高校3年まで、各クラス毎週1時間授業を実践している。授業内容は、グループディスカッション、個人プレゼンテーション、インタビューテストが中心である。

vii. スウェーデン・リンショーピン大学からのインターシップ生との交流

- ・ 計画では、6月に3週間、本校生徒宅にホームステイする形で、インターンシップ生を受け入れる予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、ZOOMを活用してのオンライン交流に変更した。インターンシップ生には、English Plus Departmentの時間に参加してもらい、「感情と共感」（高校1・2年）、「文化行事と祭日」（高校3年）をテーマに討論、発表をおこなった。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

(ア) 高校1年生：シナジータイム（特設コースI類）

- S.D.基礎（立命館コース）
- 現代社会（特設コースII類）
- 家庭基礎（全コース）

(イ) 高校2年生：シナジータイム（特設I類・II類）

- S.D.探究（立命館コース）
- 現代文B（探究テーマ「ジェンダー」に関する評論文の読解
- コミュニケーション英語II（英語を使用した発表への作文指導）

③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

各教科の授業で、本事業の探究活動に資する内容を扱う。現代文では、探究テーマとの関連が深い文章の読解、要約文の指導について、現代社会ではデータの扱い方について、英語科では、英語を使用した発表に向けての作文指導、効果的なスピーチについて等を行った。

④ 類型毎の趣旨に応じた取組について

- ・ 高校1年生の「シナジータイム」「S.D.基礎」「奈良県立大学との共同プログラム」において、生徒たちの視点で、奈良県が抱える課題を取り上げ、解決策を提案する探究活動を実施した。
- ・ 有志からなる「ボランティア実行委員会」が、奈良市福祉協議会が行っている「フードパントリー」に2日間参加した。
- ・ 地域に関する探究活動に、ディニアプトリ女子校、スウェーデン・リンショーピン大学

の学生とのオンライン交流が加わることで、グローバルな視点を養う機会としている。

- ・ ネイティブ教員との授業「English Plus Department」を活用し、語学力のさらなる向上を目指している。

⑤ 成果の普及方法・実績について

取り組み内容	成果の普及・実績
奈良県立大学との共同プログラム	・ 全国高等学校グローバル探究オンライン発表会 日本語発表部門に参加 (1/30)
奈良女子大学との共同プログラム	・ 第3回全国高校生SRサミット FOCUSに参加 (11/14・11/15)
シナジータイム	・ サステナブル・ブランド国際会議 2021YOKOHAMA 西日本ブロックに参加 (10/24) ・ 日経ウーマンエコノミクスフォーラム 2020 シンポジウム 高校生研究発表会(7/15) ・ Thai on line 交流会 (奈良新聞掲載) 現地学生・バンコク元商工会議所所長との交流(8/24)
S.D. 探究 S.D. 基礎	・ 2021/2/26「中間発表会」校内実施予定 (オンライン)
お弁当総選挙	インターネット投票で選ばれた代表4チームの弁当を村井食品の協力を得て、商品化する

⑥ 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

グローバル運営委員会が、探究委員会に働きかけ、探究委員会を中心に、進路指導部、企画広報部、教育改善委員会、教科主任会議、各学年団が連携して事業を進める。定期的に探究会議を開催し、各事業の詳細な計画・運営についての決定、各事業の進捗状況の確認等を実施し、円滑な事業遂行を目指した。

⑦ 学校全体の研究開発体制について (教師の役割、それを支援する体制について)

- ・ グローバル運営委員会を週に1度開催し、各事業の計画・運営の方針を決め、探究委員会との連携を図った。
- ・ グローバル運営委員会・探究委員会を中心に、事業が円滑に進むよう、実施学年との情報共有を行った。
- ・ 生徒の探究活動の成果普及に関しては、グローバル運営委員会が、探究委員会、企画広報部、ICT委員会と連携して実施した。

⑧ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

グローバル運営委員会と探究委員会が中心になり、研究開発を進めている。また、進路指導部主導で、評価ツール「Ai-GROW」の受検の機会を9月と2月に設け、探究活動の成果を可視化し、次年度の取り組みに生かしていく。

⑨ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

コンソーシアム	取り組み内容
コンソーシアムメンバー	本校「SDGs コンテスト」外部審査ならびに講評
社会福祉法人 奈良市福祉協議会	ボランティア実行委員会への活動支援・指導

公立大学法人 奈良県立大学	高校1年特設コースⅡ類の共同プログラムにおける指導助言
有限会社 村井食品	「お弁当総選挙」を経ての共同商品開発
学校法人立命館 立命館大学	高校2年立命館コース「S.D.探究」特別講義

## 1.1 目標の進捗状況、成果、評価

本事業の研究開発の一つである「他者を巻き込んで行動する力」の実践として、シナジータイム（高校1年）、近隣大学との共同プログラム（1年・2年）で、生徒たちが考案した課題解決の方策を行動に移すことができた。ただし、新型コロナウイルス感染拡大により、自分たちの足で確かめるといったフィールドワークを採用することが難しく、大半がオンラインを活用しての行動になった。

生徒アンケートの集計結果を見ても、昨年度より、自分自身について、「情報をうのみにせず、論理的・多面的に分析する力がある」・「物事を調査・分析・研究するにあたって情報処理をする際に求められる力がある」・「状況や目的に合わせて、伝えたいことを適切な形で表現する力がある」の質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒が、それぞれ10%から15%増え、一定の成果を得ることができた。

グローバルな視点をもって考察する機会として予定していた、シンガポール研修旅行やディニアプトリ校への育西アンバサダー派遣事業が中止となったので、9月以降、オンラインを活用して、海外で学ぶ高校生との交流を企画し、12月にディニアプトリ女子校とのオンライン交流が実現した。

今年度からカリキュラムに組み込んだ「English Plus Department」の成果は、GTECのトータルスコア（高校2年生の8月実施分）の変化には表れていない。分野別に見ると、スピーキングテストの観点別評価の「各コマの内容を伝えることができる」の評価は概ね高い（「十分に伝えられている」が90%以上）が、「各設問の問いかけに応じた内容を伝えることができる」の評価が低い（「十分に伝えられている」が30%以下）。伝えようとする意思を育成しているが、コミュニケーションに必要リスニング力に弱さがあることがわかる。

探究的な学びの実践は、全教科で体系的に実施することができていない。探究学習の事前学習としての位置づけで、実施学年の授業担当者が実施する、実践発表会で授業実践をする教員が中心に実施するという状態である。体系的に実施することが、次年度の課題である。

今年度は、新型コロナ感染拡大の中で、事業をできるだけ縮小せずに進めることに力を注ぎ、事業実施後のリフレクションを体系的に実施することができなかった。昨年度に完成させた国際バカロレアの「ATL」の手法に学んだ本校独自のルーブリックを十分に活用できなかったことが反省点である。

<添付資料>目標設定シート

## 1.2 次年度以降の課題及び改善点

- ① 学校設定科目「シナジータイム」「S.D.」（「S.D.基礎」「S.D.探究」）の3年間の実践をふまえ、本事業終了後の実施モデルとなるシラバスの作成をもって、体系化する。
- ② 教科指導・評価改革チームと教科主任会議が連携して、概念ありきの学びを継続的に実践し、評価法について研究を進め、本校モデルを完成させる。
- ③ 初年度に体系化した「ATLスキル」に基づく評価法を普及させ、教員間における課題探究の指導に関する共通理解を確固なものとする。

- ④ 本事業に参加した生徒の中で、海外大学に進学を希望する生徒が増えてきているため、令和3年3月までに、以下の大学と「包括的学術協定」締結する予定。
- ① アメリカ合衆国カリフォルニア州 Merced Community College
  - ② マレーシア Taylor' s University

【担当者】

担当課	育英西中学校・高等学校	TEL	0742-47-0688
氏名	下玉 利香	FAX	0742-47-2689
職名	教諭	e-mail	r-shimodama@ikuei.ed.jp